

# 「国占め」神話の歴史的前提

## 古代の食膳と勸農儀礼

The Historical Premise for Myths of 'Occupying' in the Regional Geography  
"Harimanokuni Fudoki": The Rituals of 'Eating Rice'  
and Encouragement of Agriculture in Ancient Japan

坂江 渉

SAKAE Wataru

はじめに

①「国占め」神話の全体的特徴

②「国占め」の食膳儀礼

③「国占め」のための勸農行事

むすびにかえて

### 【論文要旨】

小稿は、石母田正氏の研究を踏まえながら、『播磨国風土記』の地名起源説話にみえる「国占め」神話に光りをあて、その前提にある祭祀儀礼の中身と、古代の地域社会の実像解明に迫ることにした。その考察結果は、つぎの通りである。

まず「国占め」神話は、『出雲国風土記』の「国引き」神話のような広大な領域の支配に関わる神話ではなく、事実上、村の「土地占め」神話と理解される。それは古代の族長層が、その土地（クニ）内部に住まう人（農民）たちを支配するためおこなっていた定期的な祭祀儀礼の中身を反映したものであった。

史料から読み取れる具体的儀礼の中身としては、1つに、春先の稲作の予祝行事の一環として族長がその土地に杖を突き立て、支配権と勸農権の可視的確認をおこなうセレモニーがあった。また5月の初夏の頃、「クニ」内部の農民たちを祭場に集め、彼らに対して、シカの血を付した「斎種」を分与、下行する勸農行事があった。さらに3つ目として、前2者の行事を前提として、秋の収穫期になると、見晴らしのよい高台などにおいて、神がかりした族長がその「クニ」の農民たちが作り、差し出した「飯」を食し、それを通じて人々に対する支配権を社会的に誇示・確認する行事があった。

旧来の古代村落論では、村ごとの祭りのあり方をめぐり、儀制令春時祭田条などの史料にもとづき、「村首」や「社首」などの族長層の祭り（季節的には春の祭り）の準備過程における経済的収取活動、あるいは祭礼の共同飲食の場への参加などの問題に関心が寄せられてきた。しかし風土記の「国占め」神話に眼を向けてみると、支配や領有関係を可視的に確認・強化させる目的の農耕祭祀儀礼そのもの、しかもそれが複数存在していたことが浮かび上がってきた。

【キーワード】 石母田正、播磨国風土記、国占め神話、食膳儀礼、勸農

## はじめに

小稿は、『播磨国風土記』にみえる地名起源説話のうち、とくに神の「国占め」に関する史料に光りをあて、その前提にある地域社会における儀礼構造の解明にアプローチすることを目的とする。<sup>(1)</sup>

現存する『播磨国風土記』（以下、単に風土記と記す場合がある）は、和銅6年（713）の撰上命令を受け、716年頃まで書き上げられ、その後、未完成の草稿本として国衙保管されていたテキストを祖本にするといわれる。『出雲国風土記』のような完本ではなく、文字表記や配列の点で不十分な箇所がある。しかも播磨国管轄下の全12郡のうち、冒頭の国総記～明石郡、赤穂郡の条文を欠いている。現存本で確認できる地名とその起源説話は365件程度で、所載地名数は『出雲国風土記』の約3分の1にすぎない。



古代播磨の行政区分図

ただし地名起源説話の全体をながめると、興味深い2つの点を指摘できる。1つは、短文だが素朴で定型化されていない説話が多く含まれている点である。地名の由来を最終的に「語呂合わせ」で説明しようとする話が少なくないが、その際、地方色豊かな神々の話が断片的に引用されている。しかも注目されるのは、播磨国の場合、里名の由来のみならず、村名・山名・川名など、小地名の由来を語る神話断片も収められている点である。もう1つは、地名の由来を外来者の移住・開発や、他所の神の到来などに結びつけた話が多い点がある。その数は全体の3分の1近くに及んでいる(100件以上)。これらは完本である『出雲国風土記』と比べての大きな特徴の1つである。

このように魅力的な史料群があるにもかかわらず、この間、『播磨国風土記』に対する関心は全体として低かった。一方で飯泉健司氏による国文学的研究<sup>(2)</sup>、地元自治体史における新たな地名比定

考証がすすんだほか<sup>(3)</sup>、さらに2005年には、唯一の伝本である三条西家本テキストの記述内容を尊重した山川出版社版の『播磨国風土記』（沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著）が刊行された。しかし一部の著名な史料をのぞき、地名起源説話に引用される神話や伝承そのものを本格的に分析しようとする歴史研究はほとんどみられなかった。これにはさまざまな要因があるが、そもそも研究者の間で、風土記の説話研究をめぐる方法視角やその方向性が十分に固まっていなかったと認識されてきた点が大きいのではなかろうか。

しかしこの点については、最近の関和彦氏による一連の研究のほか<sup>(4)</sup>、すでに石母田正氏による先駆的な研究方法の提示と問題提起があることを忘れてはならない<sup>(5)</sup>。早く1950年代の石母田氏は、古代日本の地方社会において叙事文学的なもの、物語的なものの成立過程の分析、およびその歴史的意味を問おうとした。その際用いられた分析素材が、『出雲国風土記』意宇郡条の「国引き」神話であった。

この「国引き」の神話は、ヤツカミヅオミヅヌノ命が「<sup>くにこ</sup>国来」「<sup>くにこ</sup>国来」と呼びかけながら、さまざまな「<sup>くに</sup>国」（土地）を引き寄せ、まだ「<sup>おさ</sup>稚なく」小さかった出雲国を「作り縫っていく」という、長文の国作りの物語である。氏はこの神話にもとづく地名起源説話が、もともと宮廷神話（記紀神話）とはレベルを異にする、土地に根を張った民俗的な伝承を基盤にしていたと指摘する。しかしそれは決してそのまま民衆的世界の産物ではなかった<sup>(6)</sup>。氏によると、この詞章は基本的に「出雲の支配層の文化」の所産であり<sup>(7)</sup>、出雲国のデスポットである国造家の権威と関係するという。そして結局、これが国造一族による支配儀礼や祭祀の中で語られていた口承の一部をなし、最終的に文字化され、『出雲国風土記』意宇郡条の冒頭箇所収められたと理解する。またその一方、ヤツカミヅオミヅヌノ命の神格については、共同体や民衆の世界から分離・独立をはたそうとする「族長神」的な姿を読み取れる点などを指摘した。

この石母田説においては、神話と地域祭祀の不可分の結びつき、すなわち古代の神話が、それ自身、独立した文学作品（読み物）として創作されるのではなく、神祭りの儀式で実践的に語られるものであったこと、場合によってそこには、族長層の地域支配のあり方と結びつく儀式内容やその起源（縁起）譚なども含まれていること、また風土記の中にはそういう口承内容が全面的ではなく、断片的に取り込まれている点などが明らかにされている。戦後間もない1950年代に発表された所説であるが、今なお各国風土記の神話分析に際しても、有効な視角と方法を備えた研究と評価できよう。

ところがこれまでの研究史を振り返ってみても、こうした方法は、古代地域社会研究において十分に活かされていない感が強い。かつて1990年頃まで、儀制令春時祭田条集解などの史料にもとづき<sup>(8)</sup>、村落祭祀研究が盛んな時期があった。しかしその際、そしてそれ以降の研究において、より具体的で豊かなイメージを提供すると思われる風土記の神話史料に対しては、ほとんど関心が寄せられて来なかった。村落史研究と神話祭祀研究の成果が、お互いに交わり、活かされる機会はほとんどなかった。

そこで筆者としては、石母田氏の方法を積極的に取り入れ、今いちど古代地域社会論や村落史研究にアプローチしたいと考える。ただし素材とすべき『播磨国風土記』に引用される地方神話は、『出雲国風土記』の「国引き」神話のような長文のものはない。短文で体系的のないものがほとんど

である。したがって史料の読み込み作業はそう簡単ではない。<sup>(9)</sup>

しかしそういう中にあって、比較的長めの説話を含み、ある程度のまとまった考察をできる史料が、「国占め」（占<sub>レ</sub>国）という言葉をともなう神話群である。『播磨国風土記』には、神の「国占め」を語る話（10例）と、事実上それに相当する説話（2例）の、合わせて12例を確認できる。

これについてはすでに先行研究があり、「国占め」とは事実上、神に体现された政治主体が、一定領域の「クニ」＝土地を占有・領有することを示すと指摘されている。<sup>(10)</sup>まさに古代族長層による地域支配の実像解明に迫りうる用語だといえる。しかし従来の研究では、前述の出雲国の「国引き」神話や、宮中の「ヲスクニ＝新嘗」儀礼分析と結びつけた研究など、それぞれの問題関心に引きつけた個別分散的な考察が少なくない。

そこで小稿では、これを総体として取り上げ、まずは史料の全体的特徴、とくに「国占め」の「国」の範囲の問題など、これがどのような内容を語り得る史料であるかを考えてみたい。その上で、個々の「国占め」神話からうかがえる祭祀儀礼の中身を探りだし、これらを通じて古代の地域社会の実像解明に近づきたいと思う。

## ①……………「国占め」神話の全体的特徴

『播磨国風土記』において合計12例みえる「国占め」関連史料を一覧化したものが次頁の表である。まずはこれを参照にしつつ、史料の全体的特徴や、上の神話群が従来の研究との関連で、いったい何を語り得る史料であるかを考えてみよう。

### （1）西播地域へのかたより

第1に、史料そのものは播磨国全体に広がりを見せているわけではなく、揖保・讃容・宍<sup>(11)</sup>粟という西播3郡地域に集中している事実を確認できる（前々頁の地図参照）。そもそも「国占め」という言葉は、播磨国以外の現存する4ヶ国の風土記（常陸・出雲・豊後・肥前）において、ほとんど見出すことができない。<sup>(12)</sup>また表から明らかなように、播磨国内でも東播・中播諸郡の風土記の条文に一切あらわれていない。さらに「地を占める」などの関連史料（表-⑤）も讃容郡条のものであり、それ以外の郡に見いだすことはできない。こうした事実は、「国占め」という語句が、古代の播磨国内のうち、とくに西播地域を取り巻く歴史的環境と関わっていることを暗示するであろう。

### （2）在来神による「国占め」

つぎに「国占め」の主体として描かれる神は、いずれも播磨国内の在来神であることを指摘できる。その内訳は、伊和大神（<sup>い</sup>わの<sup>お</sup>お<sup>か</sup>み）が5例、アシハラシコヲノ命が3例、「玉津日女命」<sup>たまつひめ</sup>「<sup>ひろつひめ</sup>比売命」<sup>みまつひこ</sup>「<sup>くにしめ</sup>弥麻都比古命」<sup>くにしめ</sup>「占国之神」が各1例である。

このうち「玉津日女命」「比売命」「弥麻都比古命」などは、他の古代史料にあらわれない神名であり、<sup>(13)</sup>各地の小地域の人々に信仰された土地神であると思われる。また「占国之神」についても具体的神名は記されないが、これもおそらく小地域のローカル神であろう。

つぎにもっとも類例の多い伊和大神は、宍粟郡の石作里伊和村に本拠をおく伊和君氏らが奉斎し

表 『播磨国風土記』の「国占め」神話の関連史料一覧

○郡名・地名	登場する神名	国占め神話（地名起源説話）の中身
①揖保・香山里	伊和大神	香山里。（本名、鹿来墓）。土下上。所 <sub>三</sub> 以号 <sub>二</sub> 鹿来墓 <sub>一</sub> 者，伊和大神，占 <sub>レ</sub> 国之時，鹿来立 <sub>二</sub> 於山岑 <sub>一</sub> 。山岑，是亦似 <sub>レ</sub> 墓。故，号 <sub>二</sub> 鹿来墓 <sub>一</sub> 。後，至 <sub>二</sub> 道守臣為宰之時 <sub>一</sub> ，乃改 <sub>レ</sub> 名為 <sub>二</sub> 香山 <sub>一</sub> 。
②揖保・林田里	伊和大神	林田里。（本名，談奈志）。土中下。所 <sub>三</sub> 以称 <sub>二</sub> 淡奈志 <sub>一</sub> 者。伊和大神，占 <sub>レ</sub> 国之時，御志植 <sub>二</sub> 於此処 <sub>一</sub> ，遂生 <sub>二</sub> 榆樹 <sub>一</sub> 。故，詳名 <sub>二</sub> 淡奈志 <sub>一</sub> 。
③揖保・揖保里粒丘	葦原志挙乎命 (vs 天日槍命)	揖保里。（土中中）。所 <sub>三</sub> 以粒 <sub>一</sub> 者，此里依 <sub>二</sub> 於粒山 <sub>一</sub> 。故，因 <sub>レ</sub> 山為 <sub>レ</sub> 名。粒丘。所 <sub>三</sub> 以号 <sub>二</sub> 粒丘 <sub>一</sub> ，天日槍命，從 <sub>二</sub> 韓國 <sub>一</sub> 度来，到 <sub>二</sub> 於宇頭川底 <sub>一</sub> 而，乞 <sub>二</sub> 宿處 <sub>一</sub> 於葦原志挙乎命 <sub>一</sub> 曰，汝為 <sub>二</sub> 国主 <sub>一</sub> 。欲 <sub>レ</sub> 得 <sub>二</sub> 吾所 <sub>レ</sub> 宿之處 <sub>一</sub> 。志挙，即許 <sub>二</sub> 海中 <sub>一</sub> 。爾時，客神，以 <sub>レ</sub> 劍攪 <sub>二</sub> 海水 <sub>一</sub> 而宿之。主神，即畏 <sub>二</sub> 客神之盛行 <sub>一</sub> 而，先欲 <sub>レ</sub> 占 <sub>レ</sub> 国巡上，到 <sub>二</sub> 於粒丘 <sub>一</sub> 而食之，於 <sub>レ</sub> 此，自 <sub>レ</sub> 口落 <sub>レ</sub> 粒。故，号 <sub>二</sub> 粒丘 <sub>一</sub> 。其丘小石。比能似 <sub>レ</sub> 粒。又，以 <sub>レ</sub> 杖刺 <sub>レ</sub> 地。即，從 <sub>二</sub> 杖處 <sub>一</sub> 寒泉涌出，遂通 <sub>二</sub> 南北 <sub>一</sub> 。々寒南温。（生 <sub>二</sub> 白朮 <sub>一</sub> ）。
④讃容・讃容郡（里）	玉津日女命（贊用都比売） (vs 大神)	讃容郡。所 <sub>三</sub> 以云 <sub>二</sub> 讃容 <sub>一</sub> 者，大神妹妹二柱，各競占 <sub>レ</sub> 国之時，妹玉津日女命，捕 <sub>二</sub> 臥生鹿 <sub>一</sub> ，割 <sub>二</sub> 其腹 <sub>一</sub> 而，種 <sub>二</sub> 稻其血 <sub>一</sub> 。仍一夜之間生 <sub>レ</sub> 苗，即令 <sub>二</sub> 取殖 <sub>一</sub> 。爾，大神勅云，汝妹者五月夜殖哉，即去 <sub>二</sub> 他處 <sub>一</sub> ，号 <sub>二</sub> 五月夜郡 <sub>一</sub> 。神名 <sub>二</sub> 贊用都比売命 <sub>一</sub> 。今有 <sub>二</sub> 讃容町田 <sub>一</sub> 也。即鹿放山，号 <sub>二</sub> 鹿庭山 <sub>一</sub> 。山四面有 <sub>二</sub> 十二谷 <sub>一</sub> 。皆生 <sub>レ</sub> 鉄也。
⑤讃容・速湍里凍野	広比売命	凍野。広比売命，占 <sub>二</sub> 此土 <sub>一</sub> 之時，凍冰。故，曰 <sub>二</sub> 凍野・凍谷 <sub>一</sub> 。
⑥讃容・邑宝里	弥麻都比古命	邑宝里。（土中上）。弥麻都比古命，治 <sub>レ</sub> 井漁 <sub>レ</sub> 粮，即云，吾占 <sub>二</sub> 多国 <sub>一</sub> 。故，曰 <sub>二</sub> 大村 <sub>一</sub> 。治 <sub>レ</sub> 井處，号 <sub>二</sub> 御井村 <sub>一</sub> 。
⑦讃容・柏原里筌戸（川）	大神	筌戸。大神，從 <sub>二</sub> 出雲国 <sub>一</sub> 来時，以 <sub>二</sub> 島村岡 <sub>一</sub> 為 <sub>二</sub> 呉床 <sub>一</sub> 坐而，筌置 <sub>二</sub> 於此川 <sub>一</sub> 。故，号 <sub>二</sub> 筌戸 <sub>一</sub> 也。不 <sub>レ</sub> 入 <sub>レ</sub> 魚而入 <sub>レ</sub> 鹿。此取作 <sub>レ</sub> 鱸，食不 <sub>レ</sub> 入 <sub>レ</sub> 口而落 <sub>二</sub> 於地 <sub>一</sub> 。故，去 <sub>二</sub> 此處 <sub>一</sub> 遷 <sub>レ</sub> 他。
⑧宍禾・比治里宇波良村	葦原志許乎命	宇波良村。葦原志許乎命，占 <sub>レ</sub> 国之時勅，此地小狭如 <sub>二</sub> 室戸 <sub>一</sub> 。故，曰 <sub>二</sub> 表戸 <sub>一</sub> 。
⑨宍禾・柏野里伊奈加川	葦原志許乎命 (vs 天日槍命)	伊奈加川。葦原志許乎命与 <sub>二</sub> 天日槍命 <sub>一</sub> 占 <sub>レ</sub> 国之時，有 <sub>二</sub> 嘶馬 <sub>一</sub> 遇 <sub>二</sub> 於此川 <sub>一</sub> 。故，曰 <sub>二</sub> 伊奈加川 <sub>一</sub> 。
⑩宍禾・柏野里飯戸阜	占国之神	飯戸阜。占 <sub>レ</sub> 国之神。炊 <sub>二</sub> 於此處 <sub>一</sub> 。故，曰 <sub>二</sub> 飯戸阜 <sub>一</sub> 。々形亦似 <sub>二</sub> 檜箕竈等 <sub>一</sub> 。
⑪宍禾・伊和里伊加麻川	大神	伊加麻川。大神占 <sub>レ</sub> 国之時，烏賊在 <sub>二</sub> 於此川 <sub>一</sub> 。故，曰 <sub>二</sub> 烏賊間川 <sub>一</sub> 。
⑫宍禾・雲箇里波加村	伊和大神（vs 天日槍命）	波加村。占 <sub>レ</sub> 国之時，天日槍命先到處，伊和大神後到。於 <sub>レ</sub> 是，大神大怪之云，非 <sub>レ</sub> 度先到之乎。故，曰 <sub>二</sub> 波加村 <sub>一</sub> 。到 <sub>二</sub> 此處 <sub>一</sub> 者，不 <sub>レ</sub> 洗 <sub>二</sub> 手足 <sub>一</sub> ，必雨。

▼史料⑤と⑦には「占<sub>レ</sub>国」の文字はみえないが，関連史料として掲載した。

▼風土記の本文については，山川出版社版の『播磨国風土記』を参考にした。



たとえられる、播磨固有のローカル神である。記紀神話では一切その神名は登場しない。しかし『播磨国風土記』では唯一「大神」と称される神であり、これをまつる宍禾郡内の式内社、「伊和坐大<sup>(14)</sup>名持御魂神社」は、後世、「播磨国一<sup>いちのみや</sup>宮」に位置づけられるほどであった。

『播磨国風土記』では、この伊和大神に関連する神話の断片を、合わせて 26 例数えることができる。そのうち神自らが各地を巡行して「国作り」「国占め」「合戦」「求婚」等をおこなう話が 17 例、各地で大神の「子」「妻」「妹」などとされる神の説話が 9 例にのぼる。これを郡別にみると、宍禾・揖保・讃容郡のほか、飩磨・神前・託賀の計 6 郡にも及ぶ。その信仰圏が西播のみならず、中播・北播地域にまで広がっていることがわかる。まさに播磨最高の土地神といえるだろう。<sup>(15)</sup>

こうした伊和大神および伊和系の神々の説話のうち、神自らが「国占め」に関与したと明記する話が 3 例ある（表-①②⑫）。また単に「大神」（表-④⑦⑪）と書かれるのも「伊和大神」に含めると、その数は合わせて 6 例となる。さらに妹神とされる<sup>きよつ</sup>賛用都比売命による「国占め」神話が 1 例ある（表-④）。

つまり「国占め」に関与する神話の半数は伊和大神系ということになる。この事実は、宍禾郡内のほか、揖保・讃容の 2 郡の各地においても、伊和大神を「祭神」とする何らかの儀礼が、それぞれの地域勢力の手によっておこなわれていたことを示すであろう。

ただしそうした儀礼をおこなう勢力が、完全に伊和勢力の直接支配下に入っていたとは思われない。一定の独立性を保持したまま、伊和勢力との政治的な同盟関係を築いていたというのが実相であろう。この点については、伊和大神の「国占め」の話が、常に成功譚にはならず、神がそこから「後退」する話など（表-④⑦⑫）、「神威の弱さ」とも読み取れる話が含まれていることから確認できる（なお後述）。

一方、「国占め」神話中に 3 例登場する「アシハラシコヲノ命」（表-③⑧⑨）は、『古事記』上巻において「大国主神」の別名と書かれるように、一般的に出雲系とされる他国神である。しかし『出雲国風土記』をみる限り、この神の名は 1 例も出てこず、何ら事蹟は語られていない。これからわかる通り、この神を出雲系とするのは、あくまで記紀神話における観念上の操作の結果とみるべきである。

とすれば『播磨国風土記』での位置づけが問題となるが、この神が風土記では、むしろ他国から侵入してきた外来神（とくにアメノヒボコ）と対峙して、「闘う神」として描かれている点が注目される（表-③⑨のほか宍禾郡比治里奪谷条、同郡御方里条など）。つまり播磨を外側から侵略する神ではなく、その逆に播磨各地を守る神という位置づけが、風土記におけるアシハラシコヲノ命の特徴の 1 つである。

この点に関連して神話学者の青木紀元氏は、『播磨国風土記』の世界では、他国・異郷から侵入する外来神のうち、西播地域への外来神をとくに「アメノヒボコ」で代表させ、それに対抗する地元神は、「アシハラシコヲノ命」＝葦原の国の「醜男」（強い男）として物語る傾向があると指摘する。<sup>(16)</sup> 基本的にしたがうべき見解と思われ、結局これらによると、「国占め」の神としてあらわれるアシハラシコヲノ命についても、播磨国の在来神としてみることで<sup>(17)</sup>きょう。

以上のように、『播磨国風土記』における「国占め」の主体として語られる神は、基本的に播磨在来の神々であること、しかもその多くは伊和大神につながる伝承をもつ点を指摘できる。

### (3) 「国占め」の前提としての「神戦さ」

3つ目の特徴として、上の2点目とも関わるが、在来の神が「国占め」の行為に至る時、その前提として他神との「競争」や「先後争い」など、神が相互に争う話が挿入されているケースが少なくない点がある。

「はじめに」で述べたように、『播磨国風土記』には他所の神が移動・到来してくる話がきわめて多い(40例以上)。このうち到来した神と地元神との関係について、畿内の中央部や、より遠方地域からの神の到来譚では、両者が「衝突」したり「相争う」話はほとんどみられない。ところが隣国(とりわけ日本海諸国)や播磨国内の神々の移動の場合には、「戦い」や「競争」になる説話がたくさん含まれる傾向がある。<sup>(18)</sup>

その中で「国占め」関連の神話においては、「神戦さ」史料を合わせて4例見いだせる(表-③④⑨⑫)。そのほとんどは隣国の但馬国を代表する「アメノヒボコ」に関連する神話である。これらの事実、後述のように、古代の播磨国の交通関係の実相の一端を語っている可能性が高いといえるだろう。

### (4) 「国占め」神話の「クニ」をめぐって

第4に、「国占め」神話の多くでは伊和大神との結びつきが語られているものの、その対象となる「クニ」の範囲は、広大な領域をさすとは思われない点がある。

一般に風土記における「国占め」というと、どうしても前述の出雲国造家の「国引き」神話での「国」のような広大なものをイメージしがちである。しかし表にみえる通り、『播磨国風土記』の「国占め」の神話は、「里」「村」「川」「丘(阜)」など、小地名の起源説話に掛けて語られている。ここでの「国」は農民たちの生活に密接する小規模領域をさす可能性が高い。

鎌田元一氏の研究によると、古代日本における「国」という用語は、かなり重層的なものであった。その範囲は、上は「倭国」の「国」のような政治的な単位となるものから、下は農民たちの属する「故郷」としてのクニまで、多様な中身から成り立っていた。つまり現在でも自分の出身地のことを「クニ」と呼ぶような用法も含まれている点に注意しなければならない。そして鎌田氏は、当時の「クニ」が、単に自然物としての大地を意味するのではなく、本来、人間集団の存在を前提とすること、そして第一義的には、「人間の営為」や「生活するところの一地域」と結びついた概念だと指摘している。<sup>(19)</sup>これによると古代のクニがもともと人間との関わりをもち、それを「占める」ことも、人々の生活の場の支配、さらにはそこに住まう人々への支配関係の形成につながることを示唆するであろう。<sup>(20)</sup>

これを踏まえていま一度「国占め」神話の中身を見直すと、里(4例)、川(3例)、村(2例)、丘(2例)、野(1例)など、その対象となる地域が、すべて人々の直接的な共同生活の場といえる小地名と結び付けられているのがわかる。そしてその中には、村の名に結びつけた「国占め」の神話が2例も含まれている事実が注目される(表-⑧⑫)。

これをみると『播磨国風土記』の「国占め」の神話は、事実上「村占め」神話、あるいは村を中心とする生活の場としての「クニ」、そうした「クニ」を、神が「占める」話と言い換えて理解する

---

ことも可能であろう。<sup>(21)</sup>

もっとも上の小地名のうち、「里」(サト)が五十戸一里制にもとづく、人為的な行政組織であることはいうまでもない。筆者は「里」を当時の直接的な地域生活単位であるとみるわけではない。しかし『播磨国風土記』を含む多くの古代史料が語るように、「里」という行政組織は、通常、自然村落である「村」が2,3村集まって構成されていた。<sup>(22)</sup>それぞれの「村」は固有の名称をもって登場する 경우가多く、『播磨国風土記』ではそのような例が30件近くある。これは村が現実的に1つの生活体として機能していたことをあらわすであろう。そして重要なことは、律令制下では、里長をだす「村」が代わると、それにしたがって、それまでの「里」(五十戸組織)の名称が代わる場合があった<sup>(23)</sup>事実が指摘されている点である。

たとえば『播磨国風土記』の中にも、従来の揖保郡の「漢部里」が、庚寅年(690年)、里長の交代により、「少宅里」<sup>をやけ</sup>に変更された例が収められている。これは里長(=五十戸長)を出すムラが、「漢部」から「少宅」に代わり、それにともないサトの名も「少宅里」に代えられた可能性を示すのであろう。

したがって「里」という行政組織名に冠せられる地名の起源説話の多くは、もともとは里制(五十戸制)成立の前から存在する何らかの地名、その中でもとくに自然村落の「村」の地名の起源説話と解しうる余地がある。そうすると、「里」の地名の「国占め」神話は、律令制下で里を構成する、特定の「村」をめぐる「クニ占め」神話である場合が少なくなかったと理解されるのではなかろうか。<sup>(24)</sup>

以上のように、『播磨国風土記』の「国占め」神話を、全体としてながめてみると、これは『出雲国風土記』の「国引き」神話のような広大な領域の土地を対象とする神話ではなかった。史料の残りに方々に地域的なものがあるものの、もっと農民たちの身近な場所との結びつき、すなわち村を中心とする生活の場としての「クニ」を領有し、支配することに関連する神話であることが明らかになった。

前述のように、かつて古代の共同体論の一環として、村落祭祀研究が盛んにおこなわれた時代があった。小稿のこれまでの考察にもとづくと、『播磨国風土記』の「国占め」神話も、そうした村落レベルの祭祀・儀礼研究に資する史料である事実がみえてくる。

とすれば、これらの史料からどのような祭祀の構造と支配関係を読み取れることができるのだろうか。

## (5) 杖立て神事と「国占め」神話の多様性

これについて、従来の研究で1つ明らかにされていることは、春先の稲作の予祝行事の一環として、首長による「杖立て」の儀があったとされる点である。その専論的な分析を加えた菊地照夫氏は、まず古代の「杖」が呪術的性格をもっていたことを強調する。その上で各地の首長たちは春の初め頃、近くの高地に登り、「国見」をおこなう。それとともにそこで杖を大地に突き立てる所作をおこなう。それによりその土地に対する新たな支配秩序を、可視的に創出・確認する「国占め」儀式を実施していたと説く。そして『出雲国風土記』の「国引き」神話の中で、ヤツカミヅヲミヅヌノ命が、国引きを終えた後、意宇社に帰り、そこに「御杖」を突き、「おゑ」といったと語られるの



も、もともとはこの「国占め」儀式に根源をもち、それを背景に成立した神話だと指摘した。<sup>(25)</sup>

「国」の範囲の捉え方、儀礼に対する農民の関与の問題など、気にかかる点は少しあるが、関連史料を博搜した菊地氏の研究は説得力がある。当時の「国占め」の儀式の中に、「国見」にも連動した杖立ての神事があったことは確実であろう。

播磨国の関連史料に眼を転じて、たとえば粒丘という高台に上がって「国占め」の食事をしようとしたアシハラシコヲノ命は、「杖を以て地に刺し」、そこからは「寒泉」が湧き出したと書かれている（表-③）。これなどは「杖立て」の神事が、支配権の可視的確認という目的のみならず、農民の稲作用の水源地の確保という、勸農の問題と重なり合って実施されていたことを示唆するであろう。

また揖保郡の林田里（談奈志里）の説話によると、伊和大神は「国占め」の時、「御志」を<sup>みしるし</sup>当地に植えた。するとそこから楡の木が生えたとみえる（表-②）。ここに登場する「御志」も、国占めの可視的標識としての「杖」をさすと思われる。さらに風土記の宍禾郡御形（方）里条では、（伊和）大神の「形見」である「<sup>まき</sup>櫛の御杖」がこの村にあり、だから御形里と呼ぶのだという説が紹介されている。この話も「国占め」の儀礼に関わるもので、大神の「形見」というのは、神がここでその占有標識（＝形見）として「杖」を衝き刺したこと、さらにその遺物と伝えられる何らかのモノ（<sup>(26)</sup>櫛などの巨樹）が、当地に現存していたことを語っているのであろう。

もっとも「杖」を刺した所から泉が湧出したり、植物が生えることは実際にそう簡単にあり得ることではない。これらの話の実相は、もともとそれぞれの村里近くの湧水地（井泉）付近や、高台などのひときわ目立つ樹の下などを祭場として、神に扮した各族長が「杖立て」の「国占め」儀礼をおこなっていたこと、そしてその際、その儀式の由来を語る話（起源譚）と、その「始め神」の功績を示す神話が語られていたのだと思われる。

このようにみると「国占め」のための杖立ての儀式が、春先（旧暦の正月～3月頃）の稲作の予祝行事の一環として、各地でおこなわれていたと理解する菊地説は首肯されるべきである。ただし菊地説に付け加えるならば、1つに、「国占め」の「クニ」の内実を前記のようにみると、この儀式は各地の村の族長層によっておこなわれていたと理解できよう。もう1つは、「寒泉」の湧出伝承などに留意すると、杖立ての「国占め」の儀は、「クニ」内部の人々（農民）の再生産の問題との関わり、すなわち彼らに対する春の勸農行使の可視的確認という側面をもっていた点を見逃せないであろう。

これらが先行研究の成果から確認できる「国占め」儀式の内容の1つである。そのほかの史料をみる限り、「国占め」の話は多様で、かつ季節的にも散らばりがあるように思われる。儀礼のあり方は単に杖立て神事だけに尽きるものではなかったようである。

その一つ一つの内容をすべて明らかにすることは難しいが、残る史料をごく大ざっぱに整理すれば、1つは食や食膳に関わる史料群（表-③⑥⑦⑩）、もう一つは、「鹿」「馬」「烏賊」など、動物が登場する史料群（表-①④⑦⑨⑪）とに分類できる。これらの史料の中身を詳しくみれば、さらなる儀式内容を復元できる可能性がある。そこで以下、まず前者の史料群にスポットをあて、具体的に考えてみよう。

## ②……………「国占め」の食膳儀礼

### (1) 山上での食事をめぐる神話

『播磨国風土記』は、現存する各国風土記の中で、丘や山上での神の食事や食膳準備に関する説話がとくに多い点を特徴の一つとする。これは播磨国の平野部では、低山であってもひととき目立つ丘陵がたくさんあり、それらが山麓の農民により稲作の実り（＝食）をもたらす水源地として信仰・崇拝されていたこと、また山上で「食」をとまなう祭祀が実際におこなわれていたことの証しであろう。

そのうち「国占め」関連の史料でも、アシハラシコヲノ命が「粒丘」で「粒」<sup>いひぼ</sup>（飯穂）を食べようとした話（表-③）、弥麻都比古命が「井を治り、糧を食した」話（表-⑥）、「国占めの神」が飯戸早で炊飯をしたという話（表-⑩）など、「食」関連の説話がある。これらをみると、上に述べた、山（水源地）に対する近隣農民の信仰を前提にしつつ、「国占め」の行事として、山上などで食事をとる儀式があっ



写真 『播磨国風土記』の伊和里の比定地付近の丘陵群  
（姫路市の姫路城から北西方向をみる）

たことが明白であろう。問題はその具体的な中身と、またそこで食される食べ物（飯）の調達の流れ方である。これらを見る際の1つの手がかりとして注目したいのが、当時の宮中における大王（天皇）の食膳儀礼についてである。

### (2) 神がかりによる食膳儀礼と飯の供進

岡田精司氏の研究によると、古代の宮中祭祀では、大王ないしは天皇が、神座に着いて「神の依り代」となり、神として「神饌」<sup>しんせん</sup>や「神酒」を飲食する行事があったという。氏はその具体例として、毎冬11月の新嘗<sup>にいなめ</sup>（神嘉殿）の夜の神事と、毎年6月と12月の月次祭<sup>つきなみ</sup>の「神今食」<sup>かみいまけ</sup>の行事をあげる。これらは基本的に天皇の即位儀礼の1つ、大嘗祭の卯日の神事内容と一致する。それぞれの神饌類は、「官田」（宮内省）の民や、あらかじめ「悠紀国」<sup>ゆき</sup>「主基国」<sup>すき</sup>に指定された地方の民によって献上されるのが決まりだったと述べている。

これによると、山上での儀礼というわけではないが、その当時、天皇自らが「神がかり」の状態

をつくりあげ、神と一体化する形で、地方の民などが供進する「食事」をとる宮中行事があったこと、しかもそれが王権や天皇に対する服属儀礼（食<sup>ヲスクニ</sup>国一新嘗）の一環をなしていたことがみえてくる。

そして注目されるのは、岡田氏がこうした儀礼の起源を、当時の地域社会での祭祀の中身に求め、「神がかり」の祭事は、宮中だけではなく、地方の村落レベルでもおこなわれていたと推測する点である。氏によると、宮中での天皇の「食事」の祭祀儀礼は、早くから象徴的な模倣儀礼になっていく。ところが民間の秋の収穫祭などでの族長層の「食事」の儀礼は、永らく実質の意味合いをもって存続したと指摘している。<sup>(29)</sup>

岡田氏のこの見方を参照すると、上にあげた「国占め」神話の背景にある儀式においても、その「<sup>くにぬし</sup>国主」である族長自らが、秋の収穫期の神事の時だけ「神」として振る舞い、しかもその神事には地域住民も参加していたこと、そしてその上で「クニ」内部の農民たちが自ら収穫した「飯」（初穂<sup>(30)</sup>）を捧げ、国主がそれを食する儀礼をおこなっていたといえるのではなかろうか。

### (3) 「飯」を盛る話と粒丘で「粒」（飯穂）を食べる話

このうち族長による「神がかり」について、風土記の史料から直接その状況を読み取ることは難しい。だが農民が山上に「飯」を持ち込み、神々に捧げまつる風があったことは、近年までの各地の民俗行事の多くが語る<sup>(31)</sup>ところである。

また『播磨国風土記』でも、たとえば賀毛郡飯盛嵩条では、「飯盛嵩。右、然号くるは、大<sup>おおなむち</sup>汝命の御飯をこの嵩に盛りき。故に飯盛嵩と曰ふ」とある。きわめて短文の神話だが、その前提には「飯」の共食をとまう山上祭祀があったこと、その際、大汝命への飯を盛った主体は、この山の近くに住まう農民たちだったとみるべきであろう。

というのも、これに関連して民俗学の柳田国男が、説話の中の「盛る」という言葉について興味深いことを述べているからである。柳田によると「もる」という和語には、2つの意味があるという。1つは文字通り、ものを積み上げる、一杯にするの意である。もう1つは神や貴人に酒食等を差し出し、「もてなす」「歓待する」の意味である。このうち後者の用法は、今日も「酒盛り」「お盛る<sup>(32)</sup>」（おごる）などの語句として使われていると説いている。

つまり飯盛山という山名には、飯を盛ったような形の山の意味のほか、来臨した神をもてなすために、農民たちが「飯」を差し出す山という意味も込められていた。これは山上祭祀における「飯盛り」や「酒盛り」などの物的基盤が、基本的に農民たちの供出物にもとづいていることを示唆するであろう。そしてこれを傍証材料として認めるならば、「国占め」の神、すなわち神がかりした族長が山上等で食べたという「飯」も、本来、その近くに住む農民たちが捧げ出したものとみるべきではなかろうか。

表-③に掲げた「粒丘」の説話では、外部から来た「客神」の勢いに畏れをなした「国主」の神のアシハラシコヲノ命は、急いで粒丘に登り食事をしたと記されている。これも単に机上で作られた話ではなく、粒丘という山が、この山麓に広がる「クニ」内部の農民たちが、秋の収穫後、定期的に「飯」を差し出し、それを「国主」である族長が食するという、そのクニの支配権を可視的に確認する儀礼の場所であったことによると推定される。そして「国主」は「客神」に対して普段やっ

ていることをいち早くおこない、自らの土地への「占有」権を主張する点に話の眼目があったとみるべきではないか。

その儀礼内容を復元すると、おそらく何日もかけ神がかりの状態をつくった族長<sup>(33)</sup>は、粒丘の山上にのぼり、クニ内部の農民が差し出し新米<sup>(はつほ)</sup>（初穂）を、自ら神の資格で（神と一体化した形で）食する行為をおこなう<sup>(34)</sup>。後述のように、この時の新米<sup>(もとで)</sup>の元手である種<sup>(たね)</sup>（種）の一部



写真 粒丘の比定地の一つ「半田山」（川の右岸の山。たつの市掛保川町）

は、族長の行使する春～初夏の勸農行事において給付されたものであった。そして族長はこのように呪術的で可視的な行為を、集まってきた農民たちの前で毎年繰り返すことを通じ、この地域の「国占め」の確認、すなわち土地に住まう人に対する支配権を社会的に誇示・更新していたのではないだろうか。風土記の粒丘の地名起源説話に引用される神話は、この儀礼の開始由来を、外来神との「争い」<sup>(35)</sup>という話を持ち込んで語ろうとする儀礼の起源譚ということになるだろう。

以上のように、風土記の粒丘の神話など「食」に関する史料からは、当時の地域社会における族长層と農民たちとの間の支配・服属の社会関係を凝縮させた、「国占め」の食膳儀礼があることが明らかになった。これを確認した上で、つぎにもう1つの残存史料群に眼を向けてみよう。

### ③……………「国占め」のための勸農行事

#### (1) 「五月夜」の地名起源説話

前節では、古代の「国占め」の儀礼として、まず春の初め頃、稲作の予祝の一環をなす杖立て神事が、また秋の収穫期には、「クニ」内部の農民との支配・服属関係を可視的に確認する、族长による「飯」を食する行事があることを述べた。しかし「国占め」の儀礼は、これのみで完結しなかった。いわば上にみた「飯」を食する秋の儀礼の前提として、もう1つ、「クニ」内部の民の農耕に関わる、春～初夏の儀式があったようである。それが動物、とくにシカに関連する行事である。

その主たる素材となる史料は、表-④の『播磨国風土記』の「五月夜」<sup>(きよ)</sup>（讃容）の地名起源説話である。その内容を以下に概略すると、まず兄神の「(伊和)大神」と妹神の「玉津日女命」の2神が、「讃容」の地で「国占め」争いをおこなった。すると妹の玉津日女命が、シカを生け捕りにして腹を割き、その生血がついた土地に稲種<sup>(たね)</sup>（種）をまいた。すると一夜のうちに苗が育ち、それを



取り上げて田に植えつけることに成功した。それをみた大神は、「あなたは五月夜に植えたんだな」と言って、他所に去って行った。だから郡名を「サヨ」といい、その神の名を「サヨツヒメ」と名づけた。また今も「讃容の町田」という田んぼがあり、鹿を放した山を「鹿庭山」と呼んだと書かれている。

ここでは「サヨ」の地名起源のほか、郡内の式内社の「佐用都比売神社」の鎮座由来、さらに「讃容の町田」「鹿庭山」などの地名の起源が、国占め争いに勝利した女神の、シカをめぐる呪術的な行為と結びつけて語られている。先の「イヒボ」（粒・飯穂）の地名の場合と違い、説話の中に「サヨ」という地名の、真の起源を明かす記述は見いだせない。しかし確かなことは、式内社の佐用都比売神社の境内の祭場＝「讃容の町田」において、毎年春から初夏の頃、「国占め」のため、シカの生血を用いた稲作儀礼、——おそらく田植にも連動した「種下ろし」の儀礼がおこなわれていたことであろう。<sup>(36)</sup>それを投影させた神話の一部が、上の地名説話の中に引用されていると推定される。<sup>(37)</sup>とすれば究明すべきは、神話の背景にある儀礼の実像、とくに稲種にシカの血を浸す意味と、「種下ろし」の具体的中身についてである。

## (2) 聖獣としてのシカ

このうちまず前者の点に関していうと、古代におけるシカ（ニホンジカ）は、農作物を食い荒らす「害獣」視される一方（『豊後国風土記』速見郡袖富郷頸峰条）、特別の呪力をもつ「聖獣」として見なされていた点に注意しなければならない。たとえば記紀伝承では、とくに白鹿が山の神の化身と考えられていたことを示す史料がある（『古事記』景行天皇段など）。また宮中祭祀では、「鹿角」「鹿皮」などが、神々をまつる「料物」として用いられ、さらに稲の豊作を期する「タマ振り」儀礼の一種として、大王によるシカの「鳴き声」を聴く行事が存在したと指摘されている。<sup>(38)</sup>

このようにシカは単なる自然の生き物ではなく、稲作の豊饒の祈りと結びついた聖なる動物とも見なされていた痕跡がある。<sup>(39)</sup>これはシカがかなり大型の陸上生物であること、<sup>(40)</sup>牡鹿には毎年角が生え変わる事、さらには体毛の色合いや模様が、農耕のリズムに合わせて季節的に変化するという特徴をもっていたことが大きかったらしい。

こうしたシカの腹を割り、その生血を育苗・播種に用いるというのは、一見すると残虐で、聖獣と見なす考え方と矛盾するようにみえる。しかし古代の人々は、シカを絶対不可侵のものとして崇めていたのではなかった。一方で一定の狩猟の手続きや独特の作法などを経て、それを捕らえ、その「膾」<sup>なます</sup>（＝肉の細切り）状にした肉片を生け贄などとして神に捧げ、さらに共同飲食の場に供することがあった点に注目すべきである。<sup>(41)</sup>（『播磨国風土記』讃容郡条冒頭、讃容郡釜戸条、宍粟郡条冒頭、神前郡勢賀川条、託賀郡阿富山条、賀毛郡雲潤里条など）。そしてそれは特別な日、すなわち各地の地域社会の神祭りの時などに実施されていたのであろう。

おそらく祭りの場において、聖獣であるシカの肉は、一定の「生命力」「霊力」を得られる肉として食べられ、人々の貴重な蛋白源になったのではなかろうか。またとくにシカによる農作物被害の多い地方では、シカの狩猟と肉の共同飲食が、一定の間引き（＝害獣の部分的駆除）の役割をはたしたと推定されよう。<sup>(42)</sup>



### (3) シカの血の靈力

これらの点を踏まえた上で、いまいちど「五月夜」(讃容)の地名説話に戻ってみると、当時、シカ肉の神饌献上や共食の儀礼とも関わって、シカの「血の靈力」に期待をかけた、種下ろしの行事もおこなわれていたとみても不思議はないのではないか。平安期以降、極度に肥大化する血に対する「穢れ」意識は、いまだ風土記の時代の地方社会では浸透していなかったといわれる<sup>(43)</sup>。

むしろ『播磨国風土記』賀毛郡雲潤里条などでは、川の水を流そうとした丹津日子という神の申し出に対して、この村の太水神という神は、「吾は穴の血を以て<sup>たづく</sup>。故に河の水を<sup>ほり</sup>欲せず」と答えたという伝承が載っている。ここにみえる「穴」とは、シカないしはイノシシであると考えられ、古代におけるシカの血は、忌み嫌われるどころか、逆に田植等の農村神事において積極的に使用されるのが普通だったことを示すのであろう。シカの血は、その肉片の場合と同様、特別な靈力を帯びたものと考えられ、それに種<sup>うるみ</sup>粉を浸すことは、その靈力や生命力を種子の中に移し入れることを意味したのであろう<sup>(44)</sup>。

もともと古代の農民たちの間には、穀物である稲自体の中に神靈の存在を認め、それを重んじ崇拜することが、稲作の豊穡をもたらすと信じる穀霊信仰があった。上のシカの血の呪術は、まさにこのような農民たちの稲魂への信仰を土台とし、稲そのものに対しさらなる聖性を付する行為だったと考えられる。

つまり「五月夜」(讃容)の地名説話からは、その実効性の問題は別にして、シカの血によって稲の成長を早め、その強化と豊穡をはかろうとする呪術的な考えにもとづく、「種<sup>うるみ</sup>粉」下ろしの行事が実施されていたと推定できる。このような種下ろしが実施された場所は、前述のように、佐用都比売神社の境域内の「町田」であった<sup>(45)</sup>。それを毎年春から初夏の頃に主宰していたのは、「サヨツヒメ」の神を守護神として奉じ、しかもシカの狩猟行事の実施主体でもある、この地域の族長であったことであろう。

このようにシカに関わる「国占め」神事のあり方をおさえた上で、さらにその「種下ろし」の内実、すなわち上の町田において、聖なる種粉は実際どのように下ろされたかを考えてみよう。

### (4) 勧農としての聖なる種粉の分与・下行

先に掲げた「五月夜」の地名説話では、女神がシカの血を用いた播種を、兄の神に先んじて(一夜のうちで)おこなうことにより、相手はその敗北を認め、他所に移って行ったと伝えられている。これからみて話のパターンは、前節でみた粒丘の「国占め」神話と同一である。この場合、「国占め」にとって決定的に重要とされているのは、その土地で誰よりも先に、いちはやく「種下ろし」をおこなうことである。

ただしそれは「讃容の町田」の土地に、単に種粉が播種・投下されるだけではなかったのではないか。「国占め」の「クニ」という言葉が、本来、生活する人間との結びつきをもつ以上、ここでもそれはその土地に住まう人との関係、すなわちこの儀式には、その「クニ」の農民たちも参加し、実際には一旦播種された聖なる種粉の一部が、彼ら自身に分け与えられたとみるべきではないか。風土記の本文の中には、農民への分与を語る直接の文言は見当たらない。しかし該当箇所の史料(表

-④) には、玉津日女命が、「一夜の間に苗生ふれば、即ち取りて殖えしめる」と書かれている。

ここでは聖なる種粃の播種について「使役」の助動詞が用いられている。これは説話の前提において、儀式への第三者の関与、すなわち農民に対する種粃の分与があったことを示唆するのではなかろうか。私見によれば、このような分与・給付の儀式があったからこそ、それが「国占め」の正統化につながるという、「五月夜」の神話が形成されたのだと思われる。

すでに荒木敏夫氏が明らかにしている通り、古代の耕地占有の帰属を決める上で重要だったものは、一般に春における稲種の分与であった。<sup>(46)</sup>これは荒木氏も指摘する、古代における「加功主義」の原理にもとづく慣習である。またかつて筆者もこの問題に関連して、東大寺の越前国の初期荘園「桑原荘」関連の文書を取り上げ、<sup>(47)</sup>寄進直後のいわば「端境期」の荘園「地子」の収取権の帰属をめぐる、荘民（寄進前の農民）に対する苗代用の「種子」の下行の有無が、決定的に重要であることを指摘したことがある。<sup>(48)</sup>

その時拙稿で述べたように、ここでいう「種子」の分与・下行は、中世史でいう在地領主による春の「勸農」行事の1つ、すなわち農料の下行に相当するものと思われる。すなわち文書の中で、東大寺領の桑原荘の「荘官」的地位についた坂井郡司品治部広耳は、寄進（＝天平宝字元年〈757〉4月）直前の春先、すでに「営田貴賤」の者たちに、「苗子」を「下し畢えた」事実があったという。それゆえ彼は、当年の地子進上に堪えない旨、すなわち天平宝字元年分の地子の獲得権は、新しい領主の東大寺ではなく、自分自身にある旨を奏上した。それに対して東大寺は、「申すところ理に合ふ」と答え、広耳の申し出をそのまま許可する処置を下している。

あくまでこれは初期荘園の「賃租」経営に関連する史料だが、ここからは古代の土地領有や収穫後の「地子」収取に際しては、一般に地域の支配者の側が、種粃（種子）を単に土地に投下するのではなく、それを耕作者である農民に対して分与・給付することがことが大事だったこと、つまり勸農の行使が、地域支配の正統性の確保（＝「理に合ふ」）につながっていた事実がみえてくる。

これを踏まえて前述の種下ろしの行事を振り返ってみると、それが「国占め」という地域支配の問題に結びついた儀礼である以上、「讃容の町田」の祭場において、これに参加した「クニ」内部の個々の農民たちに対し、種粃の分与・給付という勸農がおこなわれていたこと、しかもそれは聖獣（シカ）の血のついた「齋種」<sup>ゆだね</sup>の下付という形でおこなわれたとみるべきであろう。

サヨツヒメの神を奉ずる一族の族長は、農民たちの間に存在した稲に対する穀霊信仰を前提としつつ、稲作の豊饒をもたらすと信じられていたシカの血を付した「聖なる稲種」を与えることを通じ、「クニ」内部の農民が「農」につくことを広めるとともに、合わせて彼ら自身の農耕・生産を宗教的・呪術的に支配し、まさにその稲の収穫物（の一部）の獲得を可能にしていたことになる。

古代の「国占め」は、秋の収穫後、そのクニ内部の農民たちが差し出す「食」を摂ることにより完了する。しかしその前提として農民たちに対し、族長が春～初夏にかけて、前述の「杖立て」行事にもとづき水源地の確保を強調するほか、このような宗教的・呪術的な勸農行為をおこなうことも決定的に重要であった。当時の地域族長による土地領有や農民支配の実現にあたっては、きわめて呪術的な儀礼の形であるにせよ、稲作をめぐる共同体的機能、すなわち農民の再生産を保障する機能を可視的に行使することが大きな意味をもっていたのである。

## むすびにかえて—西播地域の歴史的環境と「国占め」神話—

以上、石母田氏の所説を手がかりとして、『播磨国風土記』の「国占め」神話にスポットをあてた考察をおこなってきた。その結果を示せば、つぎの通りである。

まず「国占め」神話は、『出雲国風土記』の「国引き」神話のような広大な領域の支配に関わる神話ではなく、事実上、村の「土地占め」神話と理解される。それは古代の族長層が、その土地（クニ）内部に住まう人（農民）たちを支配するためおこなっていた定期的な祭祀儀礼の中身を反映したものであった。

史料から読み取れる具体的儀礼の中身としては、1つに、春先の稲作の予祝行事の一環として族長がその土地に杖を衝き立て、支配権と勸農権の可視的確認をおこなうセレモニーがあった。また春から初夏の頃、「クニ」内部の農民たちを祭場に集め、彼らに対して、シカの血を付した「斎種」を分与、下行する勸農行事があった。さらに3つ目として、前2者の行事を前提として、秋の収穫期になると、見晴らしのよい高台などにおいて、神がかりした族長がその「クニ」の農民たちが作り、差し出した「飯」を食し、それを通じて人々に対する支配権を社会的に誇示・確認する行事があった。

旧来の古代村落論では、村ごとの祭りのあり方をめぐり、儀制令春時祭田条などの史料にもとづき、「村首」や「社首」などによる族長層の祭り（季節的には春の祭り）の準備過程における経済的收取活動、あるいは祭礼の共同飲食の場への参加などの問題に関心が寄せられてきた。しかし風土記の「国占め」神話群に眼を向けてみると、支配や領有関係を可視的に確認・強化させる目的の農耕祭祀儀礼そのもの、しかもそれが複数存在していたことが浮かび上がってきた。

日本の古代社会は、基本的に稲作を生業とする社会であった。そこで当時の地域社会の支配者たちは、稲作をめぐる農民たちの種々の信仰、すなわち稲作にとって不可欠な水の水源地である井泉や山への信仰、あるいは稲魂（穀霊）信仰などを土台にしつつ、上のような農耕・稲作に関わる儀式をおこなっていた。このことを通じ、自己の現実的な支配・領有関係を視覚的に確認し安定化させる作業を続けていたわけである。従来の研究では、このような農民たちの「農」をめぐる信仰の問題、さらにはその前提にある再生産保障の問題にまで踏み込んだ考察はなかったのではなかろうか。

筆者はこのような「国占め」神話の前提となる村落支配に関わる儀礼が、多少の異同はあるものの、基本的に列島上の各地で実施されていたと考える。だとすれば、「国占め」関連の神話史料は、なぜ『播磨国風土記』においてのみ、これだけ顕著にあらわれ出ているのであろうか。

この点については、現存する各国風土記の編集方針や、テキストの完本や省略本による違いの問題を含め、いくつかの要因がからんでいたと思われる。その中で筆者がとくに重んじたい理由は、当時の播磨国、とりわけ「国占め」の神話が集中的にのこる、西播地域を取り巻く歴史的環境についてである。

この西播地域は、後世の「山陽道」、「出雲街道（雲州街道）」やそれにつながる「美作道」、<sup>ちず</sup>「智頭往来」や「因幡往来」などと呼ばれる官道や幹線道路が通ることからわかるように、<sup>(49)</sup>播磨国の中でもっとも人の往来が激しく、それにとまなう外来者の移住・開発・侵入等が顕著なところであった。

風土記の地名説話によると、当地における外部からの移住・開発等のあり方は、主に2つの動向をとまっていたようである。

1つは、5世紀末の雄略朝以降の歴史過程、とくに6世紀半ば頃の「<sup>みやけ</sup>飭磨御宅」の設置を画期とする、畿内の古代王権による計画的・政治的な移住・開発策である。もう1つは、おそらくこれと並行してすすみ、途中からは前者と密接に連動しながらすすんだと思われる、主に日本海側地域（但馬・出雲国など）からの、人間や小集団による主体的な移住・侵入の動きである。

このうち後者の動きについては、しばしば西播各地の「クニ」＝村のあり方やその国主の支配に対し、さまざまな軋轢や衝突などの影響を与えたようである。たとえば前掲の表-③では、アシハラシコヲの神が、この土地の「国主」であったにもかかわらず、「客神」のアメノヒボコに先んじて国占め食事をおこなったという話がみられた。これはかつてアメノヒボコの神を奉じる但馬国の地域集団の侵入が実際にあり、<sup>(50)</sup>揖保里の地名の母体となった揖保（飯穂）村における旧来のクニ支配を危うくさせる事態があったことを反映する伝承であったのであるまいか。

また①の（3）で述べた、「国占め」の前提として、神同士の「先後争い」や「競い合い」の話が語られているのも（表-③④⑨⑫）、各村の在来集団と外来勢力との間の争いの反映だとも理解されよう。さらに『播磨国風土記』の地名説話の中には、一般的に隣国の神々と播磨国内の神との「境争い」の話（託賀郡都麻里条、同郡法太里条など）、あるいは国内神同士の争いの神話が少なくない。こうした事実もこの地における小勢力の移動・到来の頻度の高さをあらわすのであろう。

一方、6世紀以降の畿内勢力の播磨国への計画的な移住・開発は、とくに宍禾郡に本拠を置き、播磨国の最高神である伊和大神を奉ずる伊和君の政治的支配のあり方に少なからざる影響を与えたようである。山尾幸久氏によると、5世紀末の雄略朝～6世紀前半の継体朝頃の播磨（針間）では、それまでの吉備勢力（上道氏系）の政治的影響力が基本的に駆逐され、王権による「準直轄領化」がすすみだしていた。<sup>(51)</sup>そして6世紀半ば頃、播磨国のほぼ中央部の<sup>(52)</sup>飭磨地域の沿岸部において、朝鮮半島情勢の緊迫化に対応するための、軍事要衝拠点的ミヤケの1つ、「<sup>(52)</sup>飭磨御宅」が設置されるに至る。

これらの一連の過程を通じて、播磨国内各地には、継体勢力系の中央氏族や渡来系氏族の播磨進出、および周辺地域の統合策が本格化したと考えられる。その中で、従来ほぼ播磨全域に勢力を保っていた伊和君一族の支配もかなり動揺することになったのではないか。

この問題に関連して中林隆之氏は、王権への石棺の造成・調達に関与し、播磨国内に居住を確認できる石作連氏の氏族系譜が、継体天皇を擁立・支持した尾張系氏族と同一の、「火明命」を始祖として仰ぐ系譜を有している点に注目する。その上で中林氏は、『播磨国風土記』の中にこの石作氏の勢力が、伊和君の一族が居住する地域に進出したことを窺わせる説話がみられること（宍禾郡石作里条、<sup>(53)</sup>飭磨郡馬墓池伝承など）、また両氏の奉ずる神同士の勢力交代を暗示させるような神話がみられること（<sup>(53)</sup>飭磨郡伊和里十四丘伝承）などにより、6世紀の半ば頃までに、それまでの播磨の政治構造が変容し、伊和君の一族の支配力が押さえ込まれたと指摘する。

風土記の地名説話や神話の中身を、中央政治史の変動の問題とも結びつけて論じた中林氏の解釈はたいへん興味深い。たしかにこの過程を通じて、従来、播磨国の最高神である「伊和大神」を奉じてきた伊和君の一族は、政治的な勢いを失い、「後退」することになった可能性は高い。そして代わって王権の側についた播磨直氏が、これ以降、播磨国内においてその勢力を拡大していったとみ



<sup>(54)</sup>  
られる。

つまり6世紀代の播磨国の西部地域では、交通の要衝に位置することに起因して、小集団の頻繁な移住・侵入がつづくとともに、中央政治の変動に連動した畿内勢力の計画的・政治的な進出が始まった。また王権による周辺地域（とくに日本海側地域）の統合策の進展により、前者の動きは新たな局面を迎え、人の出入りはより激しくなったと考えられる。

このような一連の事態の進行が、『播磨国風土記』の西播（揖保・讃容・宍粟郡）地域の地名起源説話にたくさんみられる、地元神による「国占め」の起源を語る話やその支配の正統性を語ろうとする神話、あるいは播磨の最高神である伊和大神の「神威」の不完全さを語る神話の形成につながったのであろう。『播磨国風土記』の中に、「国占め」神話が多く残っている大きな理由としては、このような6世紀以降の播磨国の他地域との交通関係と人の動きの進展、および畿内勢力との政治的な交流の変動が横たわっていると考えられる。

〔付記〕本稿は科学研究費補助金・基盤研究（C）「播磨国風土記の現地調査研究を踏まえた古代地域社会像の提示と方法論の構築」（課題番号22520669）の研究成果の一部である。

## 註

（1）——小稿で用いる風土記のテキストについては、すべて山川出版社刊の各国風土記（沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉編著）を参考にした。

（2）——飯泉「播磨国風土記・粒丘伝承考—〈国占め〉伝承の基盤と展開—」（『上代文学』63, 1989年）、同「播磨国風土記・佐比岡伝承考」（『古代文学』33, 1994年）、同「三山相闘（上・下）」（『國學院雑誌』100-8, 9, 1999年）、同「風土記〈在地伝承作成者〉の視点」（『埼玉大学紀要教育学部〔人文・社会科学Ⅱ〕48-1, 1999〕）、同「播磨国風土記」（植垣節也・橋下雅之『風土記を学ぶ人のために』世界思想社, 2001年）、同「仏像に似る神—播磨国風土記神嶋条の表現性—」（『国語と国文学』81-11, 2004年）、同「播磨国風土記—『素朴』に隠された編纂者の知恵」（『国文学 解釈と鑑賞』76-5, 2011年）など。

（3）——『加古川市史』第1巻（兵庫県加古川市, 1989年）、『福崎町史』第1巻（兵庫県福崎町, 1994年）、『太子町史』第1巻（兵庫県太子町, 1996年）、『御津町史』第1巻（兵庫県御津町, 2001年）、『小野市史』第1巻（兵庫県小野市, 2001年）、『播磨新宮町史』史料編Ⅰ（兵庫県新宮町, 2005年）、『揖保川町史』第1巻（兵庫県揖保川町, 2005年）、『加西市史』第1巻（兵庫県加西市, 2008年）、『香寺町史 村の歴史』通史編（兵庫県姫路市, 2011年）、『高砂市史』第1巻（兵庫県高砂市, 2012年）など。また揖保郡の里の比定地考証については本誌の岸本道昭論文、宍粟郡の里については、田路正幸「宍粟郡の成り立

ちとアメノヒボコ伝承」（『いひほ研究』2, 2010年）を参照のこと。

（4）——関『風土記と古代社会』（塙書房, 1984年）、同『日本古代社会生活史の研究』（校倉書房, 1994年）、同『古代出雲世界の思想と実像』（大社文化事業団, 1997年）、同『新・古代出雲史』（藤原書店, 2001年）、同『古代出雲への旅』（中公新書, 2005年）、『出雲国風土記』註論（明石書店, 2006年）、同『古代に行った男ありけり』（今井出版, 2012年）など。

（5）——石母田「古代文学成立の一過程—『出雲国風土記』所収「国引き」の詞章の分析—」（同『神話と文学』岩波書店, 2000年。初出は1957年）。

（6）——石母田前掲書, 168頁, 180頁など。

（7）——石母田前掲書, 159頁。

（8）——新訂増補国史大系『令集解』儀制令春時祭田条。

（9）——近年筆者は、『播磨国風土記』についてさまざまな角度から共同研究をすすめている。その成果としては、坂江渉編『風土記からみる古代の播磨』（神戸新聞総合出版センター, 2007年）、坂江渉編『平成19年度～21年度科学研究費補助金・基盤研究（C）播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究【改訂版】』（神戸大学大学院人文学研究科, 2010年。本報告書は神戸大学学術成果リポジトリで公開中）などがある。

（10）——岡田精司「大化前代の服属儀礼と新嘗—食国（ヲスクニ）の背景—」（同『古代王権の祭祀と神話』塙書房, 1970年。初出は1962年）、小松和彦「日本神話におけ



る占有儀礼—風土記を中心に—」（『講座日本の神話 7』〈日本神話と祭祀〉有精堂出版, 1977 年）, 飯泉前掲論文「播磨国風土記・粒丘伝承考—〈国占め〉伝承の基盤と展開—」など。

(11)——播磨国内の郡名表記はさまざまあるが、小稿では原則として風土記の記述にしたがう。

(12)——『出雲国風土記』の仁多郡<sup>みとごほ</sup>三処郷条には、「大穴持命、『此の地、田好し。故に吾が御地として古より経める』と詔る。故に三処と云ふ」とある。この史料は事実上、『出雲国風土記』にみえる「国占め」神話の 1 つといえるだろう。

(13)——讃容郡の<sup>おほ</sup>邑宝（大）村を「占めた」という「弥麻都比古命」（表-⑥）については、これを天皇名（ミマツヒコカエシネ=孝昭天皇）と考える見解がある。しかしその蓋然性はきわめて低い。むしろ古代史料の中に、「皇孫」「天孫」の言葉があるように、「<sup>あめみま</sup>弥麻」=「<sup>みま</sup>孫」ではなかろうか。つまり某神の「孫の彦神（男神）」というのがその神名の意味である。『延喜式』の神名帳によると、阿波国名方郡に「御間都比古神社」という式内社があり、これも同種の神名だと思われる。とすれば播磨国での「弥麻都比古命」が何神の孫神であるかが問題になるが、今後の課題とする。なお風土記の<sup>みま</sup>播磨郡条冒頭にみえる「大三間津日子命」についても、ひとまず、上と同様に捉えておきたい。

(14)——中世諸国一宮制研究会（代表：井上寛司）編『中世諸国一宮制の基礎的研究』（岩田書院, 2000 年）。

(15)——「延喜神名帳」によると、東播の明石郡と西播の赤穂郡において、それぞれ「伊和都比売神社」を名乗る式内社がある。これを伊和大神に関連する社名とみると、伊和大神の信仰圏は、ほぼ播磨一国に及んでいたと理解できる。

(16)——青木『日本神話の基礎的研究』（風間書房, 1970 年）, 第 1 編第 1 章「風土記の神」。

(17)——なお青木氏は、アシハラシコヲノ命の「闘う神」としての性格は、伊和大神とも通ずる点でもあると指摘する（表-③⑨のほか『播磨国風土記』神前郡多駝里梗岡条など）。ところが氏によると、アシハラシコヲノ命という神の名は、地元民の信仰に根ざした神名ではなかった。そこで西播地域では、この神と「伊和大神」とが相重なる傾向を生じたと説いている。ただしその一方で青木氏は、両者を最初から同一の神とみるのは間違いで、別々の根拠の上に存在する神であることも強調している（青木前掲書, 75 頁）。

(18)——拙稿「『播磨国風土記』からみる出雲・播磨間

の交通と出雲認識」（『古代出雲の多面的交流の研究』鳥根県古代文化センター, 2011 年）。

(19)——鎌田「日本古代の『クニ』」（同『律令公民制の研究』塙書房, 2001 年。初出は 1988 年）。

(20)——これに関連して古代の土地所有をめぐる、すでに興味深い論点を示しているのは菊地康明氏である。菊地氏は、広く前近代社会の土地所有の解明にあたっては、人と物との物権的視角ではなく、物（大地としての土地を含む）をめぐる人と人との社会的関係の解明こそが重要だと説いている（同『日本古代土地所有の研究』（東京大学出版会, 1969 年）, 275~278 頁）。基本的に継承すべき見方と考えられ、これにしたがって「国占め」の説話を見直してみると、従来とは異なる形の歴史像を得られるように思われる。

(21)——古く神話学者の松村武雄氏は、『播磨国風土記』にみえる「国占め」神話について、それが、「原初文化的に観ずれば『村占め』に他ならぬ」と指摘している（同『日本神話の研究』第 1 巻〈培風館, 1954 年〉, 288 頁）。

(22)——鬼頭清明「郷・村・集落」（『国立歴史民俗博物館研究報告』22, 1989 年）。

(23)——山尾幸久『日本古代国家と土地所有』（塙書房, 2003 年）, 314 頁。

(24)——なお「里」の名が、既存の「村」名ではなく、里内のそれ以外の小地名（自然地名）や、新たに創出されるケースがあったことは否定できない。これらの問題全体については別稿を用意している。

(25)——菊地「国引き神話と杖」（『出雲古代史研究』1, 1991 年）。

(26)——なお『播磨国風土記』揖保郡枚方里の大見山条では、品太天皇（応神天皇）がこの山の嶺<sup>みね</sup>で国見したから「大見山」と呼んだとみえている。それにつづく条文では、「御立ちする処に盤石あり。高さ三尺ばかり、長さ三丈ばかり、広さ二丈ばかり。その石の面には、<sup>ところどころ</sup>往々に窪める跡あり」とある。そしてこれを名付けて、「<sup>みくつ</sup>御杵と<sup>みつと</sup>御杖の処と曰ふ」と記されている。これをみると、本史料は品太天皇を主人公にした地名起源説話となっているが、もともとは、国見行事と連動した、地元神を主人公とする「国占め」神話をオリジナルにしていた可能性が高いといえるだろう。

(27)——岡田「即位儀・大嘗祭をめぐる問題点」（同『古代祭祀の史的研究』塙書房, 1992 年）。

(28)——このうち毎冬 11 月の卯の日の新嘗の夜の神事では、天皇は自ら「<sup>たかみむすび</sup>高皇産靈尊」となり、「<sup>いつべ</sup>嚴瓮之<sup>おもの</sup>糧」

を「嘗」める神事をおこなう。その内容は、『日本書紀』の神武即位前紀の、神武天皇による「<sup>うつしはひ</sup>顕斎」の神話と表現されているという（岡田前掲論文「即位儀・大嘗祭をめぐる問題点」, 100～101頁）。

(29)——岡田氏は、当番神主（一年神主）が祭儀の期間だけ神として振る舞い、供物などを口にする民俗事例をいくつか紹介し、今日、全国的に有名な神がかりの神事として、出雲国の美保神社の「<sup>みほ</sup>蒼柴垣神事」をあげている（岡田前掲論文「即位儀・大嘗祭をめぐる問題点」, 101頁）。蒼柴垣神事については、和歌森太郎『美保神社の研究』（国書刊行会, 1975年。初出は1955年）、島根県古代文化センター編『島根半島の祭礼と祭祀組織』（島根県古代文化センター, 1997年）を参照のこと。

(30)——ただし岡田氏は、宮中の「新嘗」「神今食」の儀に関わる説話群には、「食」の要素とともに、「性」の要素も濃厚に入っていると指摘している。氏によると、かつてそれらの儀式には、「神がかり」した大王と、貢上されてきた地方豪族の子女（采女）による「聖婚儀礼」も実施されていたという（岡田前掲論文「即位儀・大嘗祭をめぐる問題点」, 102～106頁）。しかし『播磨国風土記』をみる限り、祭祀時の「性」の要素は、歌垣に関連する史料以外に感じ取れない。

(31)——播磨国の揖保郡の故地の1つ新宮町（現在はたつの市新宮町）でも、1960年代の半ば頃まで、毎年卯月八日（4月8日）には、弁当を持参して山に登り、海を眺めたり、豊作祈願をしたりする風習があったという（『播磨新宮町史』編集委員会古代史部会が2003年7月15日に開催した歴史講座参加者におこなった聞き取り調査による）。

(32)——柳田『食物と心臓』（ちくま文庫版全集17、初出は1940年）「酒もり塩もり」。

(33)——山城賀茂社のタマヨリヒメ、三輪の大神主神の妻となったイクタマヨリヒメの話など、一般に古代では、神のタマ（魂・玉）を依り憑かせるのは、女性（巫女）の役割というイメージが強い。しかし六国史には、男性が「神がかり」した話も載せられている。

たとえば、壬申の乱の最中、大和国高市郡の大領高市県主許梅は、「にわかにかか<sup>こめ</sup>口閉<sup>つぐ</sup>びて言ふこと能はず。三日の後に、方に神着<sup>かか</sup>りて言はく、吾は高市社に居る、名は事代主神なり。また身狭<sup>むさ</sup>社に居る、名は生霊<sup>いくみたま</sup>神なり」といったという（『日本書紀』天武天皇元年（672）7月条）。また貞観7年（865）、甲斐国八代郡の擬大領無位の伴直真貞は、浅間明神（富士山）の託宣を下したという。『日本三代実録』ではそれについて、「真貞の身、或は伸び

て八尺ばかり、或いは屈みて二尺ばかり、体を変えて長短をなし、件等<sup>ことば</sup>の詞を吐く。国司、之を卜筮に求めるに、告ぐる所、託宣と同じ」と書かれている（同書、貞観7年12月9日丙辰条）。ただしこのうち前者の史料にみえる大領高市県主許梅は、女性である可能性も否定できない。

(34)——前述のように、毎冬11月の卯の日の新嘗の夜におこなわれる宮中神事では、天皇は自ら「高皇産靈尊」となり、「<sup>いつべ</sup>厳瓮之根<sup>おも</sup>」を「嘗」める行為をおこなったといわれる（岡田前掲論文「即位儀・大嘗祭をめぐる問題点」）。これによると新嘗の神事で天皇が憑依させる神霊は、天皇家の「祖霊」ということになる。しかし古代の民間レベルの神祭りの世界において、「祖霊」信仰が芽生え出すのは、平安時代以降のことだと思われる。風土記の時代においては、族長層が自らに憑依させるものは「祖霊」ではなく、自然物そのものを体現させた地域の「守護霊」とみるべきである。

(35)——ただし説話によると、食事の際、神はご飯粒をこぼしたと書かれている。こういう記述になったのは、よほど神が慌てていたという、やや滑稽なニュアンスが込められていると思われる。それとともにこの儀式が、限られた人間だけが参列する「秘儀」であったのではなく、一定の公開性をもっていたことをあらわすであろう。

(36)——『三国志』巻30の魏書東夷伝の韓条には、3世紀代の韓人の習俗として、「常に五月を以て種を下ろす。訖って鬼神を祭り、群聚して歌舞し、飲酒して昼夜休むことなし。その舞ふや数十人、俱に起きて相随ひて地を踏み、手足を低く昂くして相応じ、節奏は鐸舞に似たるあり。十月の農功おわれば、またかくの如し」（中華書局版『三国志』3〈魏書3〉, 852頁。原漢文）と記されている。

これはあくまで朝鮮半島の「韓人」の稲作の祭りに関する情報であるが、風土記の時代の播磨国の讃岐郡地域でも、毎年春から初夏の頃、田植にも連動する「種下ろし」に関わる祭祀・儀礼があったと想定しておきたい。なお各地の農耕祭祀の民俗や田遊び（芸能）の研究をおこなった新井恒易氏によると、列島上の農耕祭祀儀礼において、伝統的に盛大な規模の行事は、旧暦5月の「種下ろし」と10月の「収穫」の、2つの祭りであるという（同『農と田遊びの研究 下巻』（明治書院, 1981年）、同『日本の祭りと芸能』（ぎょうせい, 1990年））。(37)——横田健一氏もこの史料の中身について、動物犠牲をとまった「祭儀神話」の断片とみている（横田『日本古代の精神—神々の発展と没落—』講談社, 1969年）。

(38)——岡田精司「古代伝承の鹿」(同『古代祭祀の史的研究』塙書房, 1992 年。初出は 1988 年)。辰巳和弘『風土記の考古学—古代人の自然観』(白水社, 1999 年) 第 7 章「獣」, 166 頁など。

(39)——弥生時代の農耕祭祀道具といわれる各地の銅鐸には、さまざまな動物が描かれている。その数が多いのも多いのがシカである。全体の 6 割以上を占め、ついでサギ・魚・イノシシの順だという(国立歴史民俗博物館編『歴博フォーラム 銅鐸の絵を読み解く』〈小学館, 1997 年〉, 141 頁)。なお考古学者の小林行雄氏は、すでに早く 1959 年の段階で、古代のシカが「土地の精霊」と見なされていたことを強調している(同『古墳の話』岩波新書, 1959 年)。

(40)——この点に関連して考古学者の春成秀爾氏は、「鹿の角は稲とともに成長し、稲が稔る秋には完成して成長してとまる。毎年、夏から秋にかけて例外なく見事に成長する鹿の角は、稲の成長を誘導する特別な霊力をもつものとして、稲作民の眼に映るようになったのではないだろうか」と述べている(国立歴史民俗博物館編前掲書, 144 頁)。

(41)——海の生物であるウミガメも、古代以来、今日に至るまで、各地で聖獣視される動物である。ただしそれは絶対的な崇敬をうけていたわけではなかった。祭りなどの特別の日、産卵のために上陸したウミガメの一部は、「聖界」から「俗界」入りの可視的確認など、特別の作法を経て捕らえられ、共同飲食に付されるような習俗があったようである(拙稿「神戸・阪神間の浜辺にやって来ていたもの—ウミガメの上陸・産卵をめぐる文化史—」〈拙編著『神戸・阪神間の古代史』神戸新聞総合出版センター, 2011 年〉)。

(42)——『播磨国風土記』の「五月夜」の地名起源説話の末尾には、わざわざ「即ち鹿を放ちし山を鹿庭山と号く」とあることからみて、供犠用に捕らえられたシカのうち、共同飲食や血の呪術用に供される以外のシカはみな放獣されたとみられる。

(43)——大山喬平「中世の身分制と国家」(同『日本中世農村史の研究』〈岩波書店, 1978 年〉。初出は 1976 年), 399 頁。

(44)——祭祀と供犠の関係を分析した中村生雄氏によると、殺生禁断の仏教思想や血の「穢れ」意識が蔓延する以前の地域社会では、「生きものの血の中」に、「いのちのエネルギーの源」をみとめる観念が存在したと推定する(同『祭祀と供犠—日本人の自然観・動物観—』〈法蔵館, 2001 年〉, 4 頁)。また民俗学者の野本寛氏は、

古代において稲に活力を与えると考えられたものは、5 月頃にちょうど出産期を迎える牝鹿の「腹の血」ではなかったかと指摘する(同『共生のフォークロー—民俗の環境思想—』〈青土社, 1994 年〉)。

(45)——横田健一氏は、「讃容の町田」について、佐用都比売神社の「マチ田」、すなわち「祭り田」「神田」であり、それが風土記編纂の当時まで存在していたのだと指摘する(横田前掲書, 126 頁)。

(46)——荒木「8・9 世紀の在地社会の構造と人民一律令制下の土地占有の具体化によせて—」(『歴史学研究』別冊特集, 1974 年)。

(47)——天平宝字 2 年(758) 正月 12 日「越前国坂井郡司解」(『大日本古文書』東南院文書之二, 160 頁)。

(48)——拙稿「土地所有と律令国家」(『日本史研究』331, 1990 年)。

(49)——兵庫県教育委員会編『歴史の道調査報告書第 2 集 山陽道(西国街道)』(兵庫県教育委員会, 1992 年), 岡山県教育委員会編『岡山県歴史の道調査報告書第 4 集 出雲往来』(岡山県教育委員会, 1993 年), 兵庫県教育委員会編『歴史の道調査報告書第 4 集 美作道』(兵庫県教育委員会, 1994 年), 鳥取県教育委員会文化課編『鳥取県歴史の道調査報告書第 1 集 智頭往来』(鳥取県教育委員会, 1989 年), 岡山県教育委員会編『岡山県歴史の道調査報告書第 5 集 因幡往来・因幡道・倉吉往来』(岡山県教育委員会, 1993 年) など。

(50)——『播磨国風土記』にみえるアメノヒボコ=「天日杵(槍)命」については、これまで日本海ルートからの新羅系の渡来集団の象徴的存在として捉えられてきた。しかし小稿ではこれを朝鮮から渡来してきたと伝え、さらに出石郡の伊豆志神社の「八種の宝」=「珠二貫・振浪比礼・切浪比礼・振風比礼・切風比礼・奥津鏡・辺津鏡」(『古事記』中巻, 応神天皇段)を将来したという伝承をもつ、但馬国を代表する神格であると理解している。

(51)——山尾『日本古代王権形成史論』(岩波書店, 1983 年)。

(52)——『播磨国風土記』飭磨郡条の末尾には、飭磨御宅が「大雀天皇の御世」=仁徳朝に設置されたと書かれる。しかしこれは「聖王」「聖帝」とされた仁徳天皇=「仁政」観にもとづく潤色と考えられる(仁藤敦史『古代王権と支配構造』第 2 編第 2 章〈吉川弘文館, 2012 年〉参照)。飭磨御宅も含めた瀬戸内海沿岸部のミヤケの設置は、実際には、6 世紀半ば前後の時期の朝鮮半島情勢の緊迫化に対応した、王権による軍事的拠点の整備・拡

---

充策と密接に関連していると考えられる。

(53)——中林「石作氏の配置とその前提」(『日本歴史』751, 2010 年)。

(54)——なお直木孝次郎氏は、伊和君をめぐる勢力交代時期について、伊和君氏はおそらく 5 世紀代に朝廷勢力

によって圧倒されたと指摘する。そして伊和君氏に代わって播磨中央部に勢力を持ち出したのが佐伯直氏で、やがて同氏は播磨国造に任命されたと説く(『兵庫県史』1〈兵庫県, 1974 年〉, 388 頁)。

(神戸大学大学院人文学研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)

(2012 年 9 月 26 日受付, 2012 年 12 月 10 日審査終了)

---

## **The Historical Premise for Myths of ‘Occupying’ in the Regional Geography “Harimanokuni Fudoki” : The Rituals of ‘Eating Rice’ and Encouragement of Agriculture in Ancient Japan**

SAKAE Wataru

In this paper, the author tried to elucidate the Rituals of the Community in ancient Japan, while referring to Shou Ishimoda’s study. The Myths of ‘Occupying’ are used as the source which are found in the regional geography, “Harimanokuni Fudoki” edited by ancient state. The result of research are as follows:

1) The Myths of ‘Occupying’ are actually pretended periodical Rituals by the village chief in ancient Japan.

2) The one of the periodical Rituals is encouragement festival of agriculture which is used to be held as the celebration-in-advance event in the beginning of spring. At that time, the village chief took the conduct which pokes land is carried out.

3) Secondly, In May of an every year, The Rituals was held that seed is given to peasants with the blood of the deer. Similarly, It means the encouragement of agriculture in a magic form.

4) Thirdly, In the crop season of autumn, the chief who made the soul of God adhere, eats the rice which peasants offered on the heights near the village. It had an aim which shows off rule socially.

The above researches were tried, the author clearly that Myths of ‘Occupying’ in the regional geography “Harimanokuni Fudoki” offers the new fact for village research in ancient Japan.

Key words: Shou Ishimoda, the regional geography “Harimanokuni Fudoki”, Myths of ‘Occupying’, The Rituals of ‘Eating rice’, Encouragement of agriculture